# ホワイト・バッジ

WHITE BADGE

# ホワイト・バッジ

# WHITE BADGE

安正孝 アン・ジョンヒョ

金利光＝訳

**お願い——**

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「光文社の本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢なども お書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二—一二—一三
（〒112-11）
光文社　文芸編集部

ホワイト・バッジ

一九九三年　五　月三〇日　初版第　一　刷発行

著　者　安正孝（アン ジョン ヒョ）
訳　者　金利光（キム イ グァン）
発行者　大坪昌夫
発行所　株式会社光文社
東京都文京区音羽二—一二—一三
電話　東京（〇三）三九四二—二四一（代）
振替　東京六—一一五三四七
印刷所　豊国印刷
製本所　榎本製本

定価一、八〇〇円
（本体一、七四八円）

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　© Ahn Junghyo Kim I-Kwang 1993
ISBN4-334-96066-9　Printed in Japan

Ⓡ本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（03—3269—5784）にご連絡ください。

本書、『WHITE　BADGE』の日本語版を
わが友、ミネ・ヒロミチ（峯　弘道）に捧ぐ。
UPIのカメラマンであったミネは、
一九六八年三月五日、ヴェトナムで死んだ。

AJH

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

# ホワイト・バッジ

# 1

「ハクサーイ、ダイコーン」

大きな売り声を上げながら、頭に籠を載せた行商の女が早朝の町に野菜を売り歩く。

わたしは家を出て、西五陵公園へと通じる道を歩いていた。夜の雨に濡れた舗装道路には、朝早くから公園で運動をしようとする大勢の人間の姿があった。運動着を着たいかにも健康そうな彼らを見ていると、背広にネクタイを締め、磨いた革靴をはいたこのわたしがまったく場違いな人間に見える。楽しげな人群れ。右、左、右、左、リズムを合わせて尻を振り振り、自転車で坂道を上ってゆくトレーナー姿の夫婦。お揃いの真っ白なテニスズボンをはいた家族連れ。父親に肩車された赤いリボンの幼い娘。プラスチックの水筒に湧き水を汲もうとしている三人連れの老人。バドミントンのラケットと羽根を手にした太ったおばさんたちの一団。青のヘアバンドで髪を押え、はずむように走ってゆく五人の若い娘。後ろ向きに歩いていく痩せた中年の男。昨日とおなじ一日のはじまり。雨上がりの澄んだ空気を吸い込もうと公園に集まってくる幸福な人々。彼らにとって幸福とはいともたやすいことらしい。ささやかな幸せを分かち合う平凡な人々の流れにまじってわたしは歩く。わたしにも、今日は、きっといいことがあるだろう。

地元のサイクリングクラブの仲間たちだろう、あざやかな真紅のユニフォームを着た十数名の若者が、上半身を丸めた低い姿勢でリズミカルにペダルを踏みながら坂を下ってきた。彼らは、枝打ちを終えた

ばかりのプラタナスの並木に沿ってたちまちカーブを曲がってゆく。苦もなく幸せを見つけだす人々。彼らは人生を浪費してまで無益に夢を追い求めたりはしない。夢はあくまでも夢なのだ。夢を追い、夢の実現のためにすべてを投げ打つ人生こそ、価値ある人生だと考えてきたわたしが間違っていたのかもしれない。

三分で二フィート、時速〇・〇〇七五八マイル（一二・一九メートル）、一九七〇年に樹立されたカタツムリの世界最高記録。ヴェトナムで、われわれはヴェトコンの狙撃を恐れ、国道一号線を時速一一〇キロで突っ走った。いまわたしはまるでナメクジのように人生を這い進んでいる。だがわたしは欠陥ナメクジだ。両性具有のナメクジなら、生殖などいともたやすいはずなのに、このわたしは子孫も残せないナメクジなのだから。

戦闘警察隊の入口を護る隊員が、ジョギングをしたり、自転車に乗ったり、のんびり散歩しながら通り過ぎる人々をながめている。彼らの主要な任務は反政府デモを催涙弾で蹴散らすことだ。だが彼らの手にはM―16ライフルが握られている。ヴェトナムにいたころ、このM―16ライフルがどれほど欲しかったことだろう。最初の六か月間、兵士たちは重くて扱いにくく、しかも連発がきかないM―1ライフルで、自動銃を装備した敵と戦わなければならなかった。

坂道を上がり、グリーンベルトを越え、首都ソウルと京畿道との境界線を過ぎる。しばらく行くと火の見櫓が立っていて、その横に板葺き屋根の家がある。前庭には木のテーブルが並べられ、運動を終えて帰る人々をめあてに熱い汁や簡単な食事を売っている。男たちが額に汗を浮かべ、ヘジャンクッや湯気の立つ豚の足をうまそうに食べていた。わたしは道端のテーブルに座り、雑炊を頼んだ。

アーチェリー場の横では中学生の女の子二人がバドミントンの羽根を追いかけている。彼女たちは打ちそこなってばかりいて、そのたびに声を上げて笑う。黄色い上着、赤いTシャツ、ピッチリした白いスラックス。まぶしい若さ。純粋で、汚れを知らない少女。だがこの少女たちも、もうすぐ大人への入

口を通り抜け、絶望、反抗、恐れ、裏切りなどという人間の陰の部分に気づくだろう。そして心には様々な葛藤が生まれるのだ。

なぜわたしには疎外感がつきまとうのだろう。自分が所属すべき場所はきっとどこかほかにあるという思い。人生が自分の手を離れてひとり歩きしていくような焦燥。ほかの場所で、ほかのことをやっているべきだという強迫観念。人生が自分の手から逃げてゆく。今日、たったいま、この場で、自分の人生のこの局面において、わたしにはほかにもっと大事なことがあるはずだ。昨日も、今日も、明日もゲラ刷りを広げたデスクに向かう。誤植を拾い、他人の文章をチェックする毎日。たった一度だけの人生を、わたしは間違いなく無益に送っていた。

熱い雑炊で空腹をなだめ、再び坂を下って公園の入口までたどり着き、しばらくあたりをぶらつく。エアロビクスに汗を流す者、マットの上でヨーガのポーズを取っている者、スローモーションのブレイクダンスでも踊るように手足を屈伸させる者、タオルで汗を拭きながらジョギングする者、そして朝飯を食べながらのんびりと彼らをながめているだけの者。わたしは公園入口の停留所でバスに乗り、ソウル市街へと向かった。

八時四分。事務所に着き、コーヒーポットのプラグを差し込んで机に向かい朝刊を読む。アメリカ、魚雷発射装置八基搭載の〈静かな〉潜水艦を開発。アメリカ、訓練用に中国製のミグ21機購入予定。政府、北に対する軍事的優位維持へ総力。アメリカ国防次官、北による韓国侵略の可能性を示唆……。

一面は相も変わらぬ軍事関係のキナ臭い記事であふれている。わたしはページを繰った。だがそこに並んでいるのも似たような記事だ。サウジアラビア政府、領空侵犯機の即時撃墜を声明。ソ連、超音速爆撃機ブラックジャックの極東配備を企図。イラン、限定停戦協定違反、バスラの民間人居住区を爆撃……。悲鳴は次のページからも聞こえてくる。ソ連のアフガニスタン侵攻、ガンジー首相とシーク教徒との対立、ミンダナオ島の共産ゲリラ、中国とヴェトナムとの衝突、果てしなく続く北アイルランドの

テロ……。病んだ地球。

どんよりと曇ったソウルに立ちこめた霧もしだいに晴れ、喧騒とスモッグの一日がまたはじまろうとしていた。九時になると、民間防衛隊の講話を聞くため職員全員が三階の講堂に集まった。訓話のあと、韓国動乱（朝鮮戦争）当時の様子を記録した傷だらけのスライドが映写される。六・二五（韓国動乱の開戦記念日）があと数日でまためぐってくるのだ。タイムに載ったロバート・キャパの写真、大同江に架かる鉄橋の残骸を渡って逃れる避難民を写したあの写真が映しだされる。そして、ぼろ布のかたまりみたいな兵士の死体が雪野原に散らばっている写真。子供時代に見慣れたあの雪景色。それから、共産軍に追われ、アメリカ軍の軍艦で逃げようと吹雪の興南港につめかけた十万人の避難民の写真。桟橋を埋め尽くした避難民の顔に、いつかニュース映画で見たある光景が重なる。それは、サイゴン陥落直前にアメリカ大使館に逃げ込もうとしていたヴェトナム人群衆の顔だ。

突然、説明員の声がひときわ高くなった。「けっして忘れてはなりません。共産主義者の侵略に断固として立ち上がった学徒動員兵士のことを」わたしは釜山の悲惨な難民生活を思い出した。板切れやC―レイション（米陸軍C号携帯口糧）の箱板を打ちつけて作ったあばら屋。有刺鉄線で両手を縛られたまま殺された民間人。積み重ねられた死体の山。人間が大量の人間をいともたやすく虐殺する光景。

母方の叔父は学徒動員され、飢えと寒さに苦しみながら風の吹き込む貨物列車で各地へ運ばれた。一年後、叔父は見る影もなく痩せ細り、憔悴と恐怖の表情を浮かべて戻ってきた。軍には彼らに持たせる銃さえなかったという。爆撃を受けて廃墟となった街にたたずむ子供のスライド。垢の浮いた体にぼろ布のような服を着、腹を空かせ、シラミだらけになった少年。それはあのころのわたし自身の姿でもあった。〈戦争孤児〉が街にあふれ、いたるところに孤児院があった。そしてスリと靴磨き。衣料品、時計、鉛筆、糸、紙、玩具（ああ、あの美しいビー玉）――アメリカ赤十字が送ってくる救援物資は打ちひしがれた韓国民にとってどれも夢のような品々であった。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

戦争がはじまったとき、わたしは国民学校（小学校）の二年生で、生計の足しにとタバコ売りや靴磨きをやった。戦争になれば男も女も、子供さえも、平和なときにはけっしてやらないことをやるものだ。ある夜、父は他人の田んぼに入り、はさみで稲の穂を切り取ってきた。母は父が盗んできた紙袋のなかの米を見て声もなく泣いた。

縄をない、アルミの箸をヤスリで磨き、なんとか口を糊する。食うためには何だってやらなければならなかった。

共産軍に無理やり協力させられた父が何か月か刑務所に入れられた。だが、悲しくはない。大した金も稼がない父は、誰よりも多くの飯を食ったのだ。やがて父は釈放され、ある日、母は父に、洗濯する間、〈店〉をみていてくれと頼んだ。店といっても刑務所横の裏通りに鉄の平鍋を置き、そこにイカのフライを並べて近所の子供に売るだけのことだ。洗濯を終えた母が〈店〉にきてみると、父はきまり悪そうな顔で平鍋の前に座っていた。暑い夏の午後だった。この日の眩暈がするような太陽はいまも忘れられない。刑務所生活ですっかり腹を空かせた父は、目の前のイカのフライに我慢できず、〈店の売り物〉を全部食ってしまったのだ。母はまた声を押し殺して泣いた。

わたしの人生は戦争の連続だった。生まれたのは一九四一年十二月、日本軍による真珠湾攻撃とフィリピン侵攻があった。子供時代に韓国動乱を経験し、青年時代の一時期にはヴェトナム戦争に従軍した。誰かに子供時代を語れといわれれば、わたしは童謡のかわりに軍歌を歌ったあのころを果てしなく語ることだろう。長蛇の避難民にまじって夜通し歩き続けた雪の尾根や丘、猛烈な爆撃と黒煙を上げて燃える龍山駅、共産軍の猛攻に撤退するアメリカ軍が残したパン、彼らがトラックから投げるC―レイションの缶詰、アメリカ赤十字の救援物資、幾晩も続いた仁川沖からの艦砲射撃、夜中に撤退する軍用トラックの轟々たるエンジン音、国連軍兵士を相手にする女たち、ゴミ捨て場をあさって集めた材料で作る〈豚汁〉の味、赤い大きな丸の図柄のラッキーストライク、共産軍からの敗走を意味する国連軍の

〈戦術的〉退却……。そう、それに、雪の野原に置き去りにされた妹の紀子。
〈人海戦術〉で国連軍を圧倒した中国軍がソウルに攻め込むという噂を聞いて、わたしの一家は素砂に避難した。状況をみきわめようとソウルに留まった父とはそのまま生き別れになり、ようやく再会したのは戦争がほとんど終わりかけたころだ。わたしたちは祖母の家で一週間ほど過ごしたが、アメリカ軍と韓国軍の兵士が村に来て、共産軍が攻め込んでくるからすぐに避難しろといった。わたしたちは父をソウルに残したまま、どうしても必要な荷物だけをまとめて村を出た。幸い、親切な隣人が荷物と妹や弟を牛車に乗せてくれた。避難民ははるか先の雪山の上まで列をなし、衣服や毛布や鍋釜などの荷物を背負い、頭に載せ、あるいは抱え、途切れなくつながりながら南へと進む。わたしは果てしなく続く曲がりくねった道を母の後ろからとぼとぼと歩いていった。
安養の近くまで来ると兵士が道をふさぎ、退却する軍の邪魔になるから牛車や荷車は置いてゆけといった。通行できるのは人と家畜だけ。避難民は荷物を小さくまとめなおす。雪野原には無数の荷車が置き捨てられた。まだ歩けない弟や妹を背負った母と祖母はほとんど荷物を持てなかった。二歳年下の妹、紀淑は戦争勃発直後に結核で死に、下の妹の紀絢はまだ生まれていなかった。だがそれでもわたしの下にはまだ三人いた。妹の紀子と弟の基鐘と基完だ。この三人を誰かがおぶって行かなければならない。母と祖母が一人ずつ背負うことはできた。だが残りの一人をどうするか。しかもこの先どれだけ歩かなければならないのか予想もつかないのだ。結局、一人は置き去りにするよりほかになかった。そして紀子が残されることになった。紀子は年子の弟の基鐘と母親の乳を分け合って育ったためか栄養不足で目がいくらか不自由だった。また母も祖母も女の紀子より二人の弟を救うべきだと考えた。他の避難民が捨てたゴザを何枚も重ねて敷いた上にちょこんと座った紀子はまるで小さな仏像のようだった。母は紀子の頭と肩に厚手の服を二枚かけ、両手を毛のマフラーで包んでやり、右手に握り飯を載せ、さらに二つをゴザの上に置いた。わたしたちは南に向かって歩きだした。母は号泣し、いつまでも泣きやもうと

しなかった。マフラーでくるまれた手に握り飯を載せたまま、四歳の紀子は泣きもせずに、離れてゆくわたしたちをぼんやりと見ていた。置き去りにされることの意味さえわからなかったのだ。

紀子が見えなくなってからも、母は泣き続け、何度も後ろを振り返った。一時間ほど行ったとき、祖母が逃げるのをやめようといった。たとえ共産軍に皆殺しにされても紀子を見捨てることはとてもできない、と。大急ぎで引き返すと、紀子はまるで奇跡のように、避難民が捨てていったゴザや衣類や家財道具の間にぽつんと座っていた。小さな手には冷えて固まった握り飯がそのままあった。紀子はわたしたちを見ても泣かなかった。優しく笑って紀子を抱いた母は、やがて激しくしゃくりあげた。弟と妹三人を乗せた荷車を母が引き、わたしたちは素砂に戻った。ときどき泣き出しはしたが、母は素砂に着くまでずっと嬉しそうだった。祖母の家の近くで北の兵士たちに出会ったが、母は彼らにまで笑顔を見せた。

まわりの仲間が立ち上がり、列になって講堂を出ていく。わたしははっと回想から覚めた。民間防衛隊の講話は終わっていたのだ。

# 2

「きわめて厳しい状況だ」

朴南俊専務は〈緊急会議〉に呼ばれた幹部たちがまだ腰を下ろしもしないうちに切り出した。

「もう七月で、二、三週間もすれば夏休みだ。ボーナスも払わなければならんのに、売れ行きは極端に沈滞し、地方書店からの返本も多い。緊急に対策を立てなければならん。なんとかベストセラーを一、二冊出せんものか」

会議のたびに、朴南俊専務は月に十万部は売れる企画を出席者に求めるのだ。第二編集部の南浩植部長が、八月中旬に連載が終わる予定の『風の運命』という新聞小説の版権取得を提案した。それは確かにベストセラーを狙える大河小説だった。だがこの小説の版権を取ろうとすれば、すくなくとも二年前に手を打つ必要があったろう。すでに大手四社が一年も前から五百万ないし千万ウォンのアドバンスを提示してその獲得に鎬をけずっていた。次に発言したのは第一編集部の李元世部長だ。彼は販売部数が確実に見込めるきわどい小説、華麗なビジネスの世界を舞台にポルノをたっぷり絡めた小説を狙ったらどうかといった。だが、この彼の持論を朴南俊専務は今度も採択しなかった。

「最近の海外小説はどうかね、韓部長？」崔仁煥出版局長がわたしに訊く。彼は会議のたびにこのセリフを必ず一度は口にした。「翻訳ものでひとつ当ててみたいものだが」

わたしは、ブルガリアのソルジェニーツィンといわれているゲオルギー・マルコフの『殺された真

実』、ソール・ベローの『足を口に入れた男』、ピュリツァー賞を受けていながら韓国ではほとんど知られていないウィリアム・ケネディの『ヤナギアザミ』、そしてアーサー・ミラーの『北京のセールスマン』など、最近読んだ本の名前をあげた。

「ベイジンとはどういう意味かね？」朴専務が訊いた。

「ペキンのことです。以前は英語でもペキンと表記したのですが、近ごろはベイジンと綴っています」

「ほう、するとやはり戯曲かね。『セールスマンの死』は読んだことがあるが」

「いや、戯曲でなく、ミラーがペキンを訪れたときのことを書いた本で……」

わたしはとんでもないへまをやらかしていることに気がついていた。いま韓国で売れそうな本の話をすれば事足りるのに、いつの間にか毛沢東が死んだあとの中国の文化状況まで講釈していたのだ。だが成り行き上、話を中止することもできず、サイゴンの空気を汚染したホンダやスズキのオートバイが、いまや中国大陸を席捲し、上海では電子ゲーム機を設置したゲームセンターが大流行、政府要人は日本製のテレビで世界情勢を把握しているとか、上海の映画館では『テス』が上映され、『スターウォーズ』や『戦争の嵐』が中国語に翻訳されていることや、若い世代にはナイフやフォークでビフテキを食うものまでいることなどを弁じ立てた。

「毛沢東の時代には想像もできなかったことですが、中国の音楽家はベートーベンの曲まで演奏しています。彼らがブラームスの交響曲第二番を演奏したときには――」

「ブラームスの交響曲とわが社のこの夏の売り上げと何か関係でもあるのかね」朴専務は苦虫を噛みつぶしたような顔をした。

彼のいう通りだ。おれの大脳に詰まったゴミみたいな知識など、この世進出版の業務に何の値打ちがある。いや、会社にとってどころか、そんなもの、そもそも何の価値もありはしない。会議の席でなぜ愚にもつかない話をしたのだろう。今度がはじめてじゃない、おれが夢中でしゃべりだすと、必ず専務

を怒らせる羽目になる。わたしは窓ガラスをつたって落ちる雨粒をぼんやりとながめた。今日は昼の長さが十四時間と三十二分だ。

長い午後だった。会議はだらだらと続いた。これという業績改善の決め手がないことを知り、朴南俊専務は秋の新学期に合わせて何か五巻セットの企画を立てるよう指示した。崔出版局長はその企画の叩き台を午後の会議再開までに準備するようわたしにいった。大急ぎで案をまとめなければ。一つの案だけではだめだ。責任感とやる気を疑われ、専務の不興を買う。

午後の会議がはじまり、わたしはそれらがさも価値あるかのように、次々と用意した企画案を説明した。耳の聴こえない聴衆に向かって、ばらばらのオーケストラを指揮するような作業。なぜおれはこんな虚ろな言葉をぺらぺらとしゃべっているのだ。

「ウィンストン・チャーチルも小説を書いたのかね？」十二ページにまとめたレジュメの三番目の項目に目を走らせながら朴専務が訊く。

「ええ、若いころに」

「『有名人が残した未発表傑作小説選』か、面白そうだな。小説の中身をもうすこし詳しく話してくれんか」

わたしは、サラ・ベルナール、ウィンストン・チャーチル、石油王H・L・ハント、ベニト・ムッソリーニ、ハリー・リーズナーなどが書いた小説の中身をかいつまんで説明した。

「ハリー・リ……。それはどんな男かね？」

「シックスティ・ミニッツのアンカーマンです」

「シックスティ・ミニッツ？」

わたしは手短かに説明すると、すぐ次の案に移った。『世界ミステリー全集』、『世界傑作短編五十選』



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com